高齢化について憂慮される第3点は文化や技術の衰退であるが、これは杞憂にすぎないという。中高年の人に出来ることでヤングオールドに出来ないことはほとんどないからである[26]。

3) 老後に頼れるのは娘

和田医師の意見で興味をひくのは、老後を頼れるのは嫁ではなく「娘」の時代に入ったという考えである。和田医師は高齢者専用の総合病院に10年間勤務した経験から老後の介護は嫁ではなく娘が果す時代になったと指摘している。

「男の子を生んで、一生懸命教育をつけて、老後はある程度、その子をあてにするという図式はとうに崩れている。そういう意味では子供はあてにならなくなった。その一方で、娘を産んでぜいたくに育てて、結婚してからも親として援助するかわりに、年をとったら面倒をみてもらう、少なくとも同居するという新しい図式が現実のものとなった」[27] と述べている。

以上、和田医師のヤングオールドの労働力化によって高齢化社会の重圧を克服し得るとの意見は傾聴に値するし、必然的にその方向に向っていくと思われる。また老後の面倒を見るのが嫁から娘へという意見も現実となりつつある。

(5)「女が子供を生まない本当の理由」

次に林教授の論説を取上げてみよう。

1) フェミニストの主張する少子化の原因

林教授はフェミニストが主張する少子化の原因に強い関心を寄せその主張に疑問を抱いている。フェミニストは少子化の原因として二つをあげている。一つは「働く女性が子どもを産むと、女性に過剰な負担がかかる。保育所などの、子育てに対する社会や国の支援体制が不足しているので、働く女性が子どもを生むと、仕事を断念しなければならなくなる。仕事を止めないようにすると、子どもの数を少なくせざるを得ない。これは男性中心の社会システムが悪いせいである」[28] というものであり、第二は「男性の中に性別役割分担の考えが強いので、子どもが生まれても、男性は家事や育児に協力しない。女性が働いている場合には、負担は一方的に女性にばかりかかる。だから女性は子どもを生みたがらないのである[29]というものである。

2) 心理的・本能的要因

林教授によるとこれら二つの理由は結局のところ同じもので、「男性中心社会の意識や制度が悪いために、女性にばかり一方的に負担がかかるから、女性は子どもを生まないのだという見方である」[30] が、このような主張には疑問があるという。

教授によると、この見解の問題は「女性が子供を生みたくないという原因を、物質的条件から見ているところ」[31] にあるが、これは原因の一部にすぎず、子どもを持つことの「心理的喜び」を軽視してはならないと主張する。そして「現代の人間からは、子どもは可愛いとか、子育てが楽しいという心理的な動機が薄れていることこそ、少子化の最も大きな原因だ」[32] と説いている。そして子どもをほしいと思うのは、多分に本能的な欲求でもある筈だという。すなわち「女性の場合には、子どもを持つと何か得をするからという功利的な理由よりも、単純に〔子どもをほしい〕という本能的な次元の動機が大きい意味を持っている」[33] と指摘している。

3) 子ども＝負担という心理

林教授はこのようなことになるのは心理的・本能的な次元で、なにか異変が起っているからではないかという仮説を立てて検討している。

現実の子育てが負担だから、女性は子どもを生まないのだと言われるが、「若い女性達に最も大きくのしかかっているのは、子どもが実際にどのくらい負担だとか、金がかかるかということより

26) 和田秀樹「少子社会は恐くない」 PHP『Voice』1998年11月号 172頁
27) 同上 173頁
28) 林道義「女が子供を生まない本当の理由」読売新聞社『This is 読売』1998年9月号 210頁
29) 同上 210頁
30) 同上 211頁
31) 同上 211頁
32) 同上 212頁
33) 同上 212頁